

山形県の縄文時代後期前半の土器について

— かつば遺跡を中心に —

水戸部 秀 樹

1 はじめに

山形県内出土の縄文時代後期前半の土器については、これまで良好な資料に恵まれなかったこともあり全容が知られることはなかった。しかし、平成12年度に発掘調査が行われ、平成15年に報告書が刊行された最上町のかつば遺跡（水戸部2003）の豊富な資料により、詳細な検討が可能になったと言える。

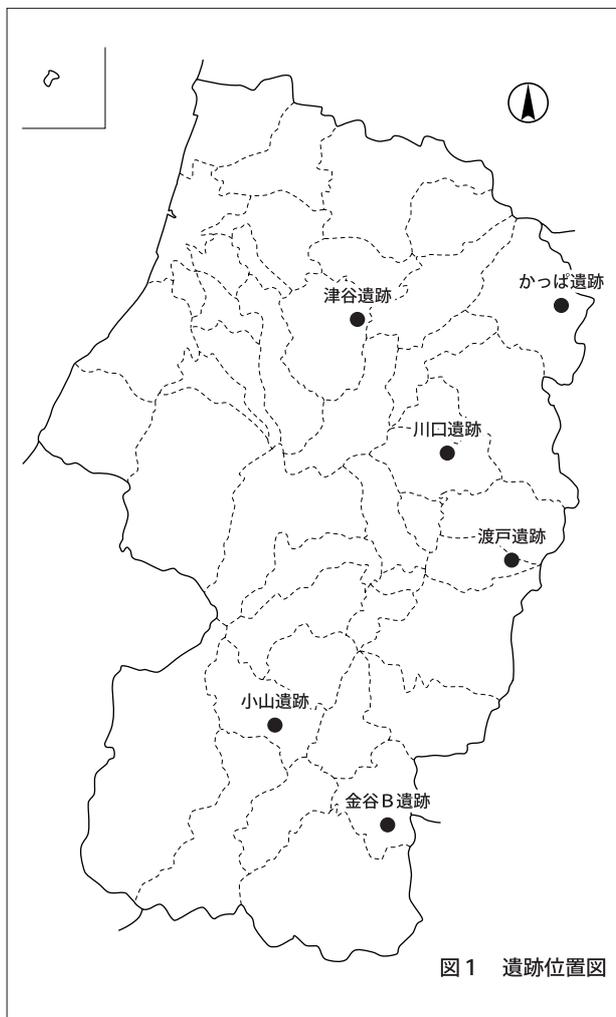
かつば遺跡は、最上町^{むかいまち}の向町盆地内を西へ流れ最上川に合流する小国川に注ぐ鳥出川^{とりで}の右岸に位置する。最上町は、山形県の北東端にあるため東は宮城県に接し、また、秋田県・岩手県にも近い。最上町内を東西に貫く国道47号線は現在でも奥羽山脈の東西を結ぶ交通の要である。

かつば遺跡では亀甲形の柱配置を持つ六本柱の掘立柱建物跡7棟をはじめ、竪穴住居跡、貯蔵穴、土坑、旧河道など多数の遺構が検出された。

遺物の出土量は470箱で、土器はその内300箱である。特に旧河道S G 21から多数出土した。中期では大木8 a 式土器、主体となる後期では堀之内1式から加曽利B 2式に併行する土器群が見られる。中でも堀之内2式から加曽利B 2式併行までのものが出土土器の大半を占める。

筆者が執筆したかつば遺跡の報告書では種々の制約と力量不足から、考察を行うことができなかった。よって本稿ではかつば遺跡の土器群の詳細な検討と、併せて山形県内出土の当該期の主要な遺跡の土器群をかつば遺跡での検討の成果を踏まえて位置付けを行い、県内の後期前半土器群の実態を明確にしたい。また、今回はより変遷を捉えやすい精製土器のみを扱う。粗製土器については今後の課題とする。

先に述べたようにかつば遺跡で主体となる土器は、堀之内2式から加曽利B 2式併行のものであり、今回検討の対象とするのもその3型式に併行するもののみであ



る。また、時期的な位置付けなどが報告書と矛盾する点があったとすれば、本稿を優先させたい。

堀之内1式併行以前の土器については、平成15年度に発掘調査を行った長井市の空沢遺跡^{からさわ}¹⁾で中期末から後期初頭の良好な資料が得られており、その内容を検討した後に改めて起稿したい。

2 型式について

かつば遺跡発掘調査報告書では、出土した後期前半の土器の分類を南境1・2式、宝ヶ峯1・2式として行い、それぞれ堀之内1・2式、加曽利B 1・2式に併行すると考えられるものを当てた。この編年は小林圭一氏の提

唱²⁾によるものである。小林氏は「東北地方の後期の編年研究というのは、あくまでも関東地方との対比ということで成り立ってきた学史的背景も有りますので」(縄文セミナーの会2001)とし、伊東信雄氏の型式名(伊東1956)を用いて、加曾利B 1・2・3式には宝ヶ峯1・2・3式を、曾谷式には西ノ浜式、安行式1・2式には金剛寺1・2式を当てている。その分布範囲はそれぞれの型式により消長はあるものと考えられるが、おおよそ東北地方南半部である。

今回も引き続き小林氏の型式名に従う。また、編年の根拠とする関東地方の土器型式である堀之内式と加曾利B式の内容については安孫子昭二氏の文献(安孫子1981・1998)などを参考にした。

東北地方北半部では金子昭彦氏により、仮称新山権現社1・2・3式が提唱(金子1994)され、それぞれ加曾利B 1・2・3式にはほぼ併行³⁾するとしている。

一方、鈴木克彦氏は安易に関東地方の土器型式に対応させることを批判し、その地域の型式体系の系統性を理解することが優先である(鈴木2003)と論じている。確かに遠隔地である関東地方の土器型式と一対一で東北地方の土器が符合することはないであろう。しかし、かっぱ遺跡では関東地方の土器と類似するものも多数出土しており、本県出土の土器群の実態をつかむためには、それらの併行関係を探る鍵となる土器は、非常に有効であると考えている。

また、型式は究極まで細分されるべき(山内1932)であることに異論はないが、本県のようにようやく資料が出揃ったばかりで、その様相すら明らかでない現状では、先行する研究成果を持つ土器編年を時間の物差しとして使用し、大枠を捉えた上で、今後のより詳細な細分作業に備えることが先決とも考えている。

先にも述べたが、出土遺物の位置付けは、関東地方の土器編年と一部は東北地方北半の土器編年をもとに配列したものであり、層位的な検証なしに行った誇りは免れられない。発掘調査では土器の多くが遺物包含層と旧河川S X 21から出土している。いずれも黒色土であり分層が困難であったこと、またそれらの層を上から掘り込む遺構も多数見られ、層位が攪乱されていることも予想されたことなどが、遺物の層位的な把握を行えなかった要因である。遺構出土の遺物においても確実に共伴関係

を認められるものは少なかった。

それ故、編年についても大まかなものしか提示できない。さまざまな批判はあるだろうが、敢えて先行研究の成果と型式学的検討から以下論じてみたい。また、先学の研究を誤って解釈・引用している箇所があれば全て筆者の責である。

3 かっぱ遺跡の土器編年

発掘調査で出土した土器は整理箱で約300箱、うち報告書に掲載したものは548点と非常に少ない。限られた紙数であるため、報告に際しては土器の時期、器種、器形、文様、地文などが同じものはなるべく省き、それら一つでも異なれば掲載するという方針を採った。分類ごとの多寡については正確にはつかめていないが、土器のバラエティーは網羅している。

南境2式(堀之内2式併行)

南境2式は図2・3に提示した。図3-20の浅鉢のみ関東地方の堀之内2式の浅鉢に非常に近い。ほかはいずれも大湯式(江坂1956)と言われる土器に該当する。大湯式については江坂輝弥氏が提唱したが、磯崎正彦氏の十腰内編年の発表後はあまり使われなくなったようである。1985年には本間宏氏は「前段階の系譜をひく土器が分布圏を南方に移動したものであり、「十腰内I式」とは区別されなくてはならない」(本間1985)とし、大湯式を再提唱している。その特徴は充填縄文手法による波状入組文と片口土器が器種構成に含まれる点にあるとし、分布範囲は概ね秋田県・岩手県・山形県・宮城県であるという。大湯式は本間氏の段階設定の第5段階であり、6段階は大湯式の退化型式であるとも述べている。

秋元信夫氏もまた「十腰内I式の範疇に入れがたい資料もふえてくる」(秋元1986)とし、大湯式を再提唱し、仮称大湯I・II・III式と分類した。また、併行関係については、大湯I式は関東地方の堀之内1式、同II式は堀之内2式・十腰内I式後半、同III式は後期中葉として位置付けた。大湯III式の土器の内容については詳しく触れられていないが、筆者は加曾利B 1・2式併行のものと見ている。

更に本間氏と同じく前段階の土器に系統性を持たないことを認め大湯式を再設定した金子昭彦氏の研究(金子1995)がある。その内容は片口土器を器種組成に含み、

三本沈線で文様を描き、文様内に縄文を持つという文様描出手法が顕著な型式であるという。分布は秋田・岩手の両県と、宮城・山形県の北部としている。併行関係については、大湯式を（古）・（新）に細分し、金子氏の十腰内Ⅰ式細分（金子1994）の十腰内Ⅰ（新）・Ⅰ（最新）に対応させている。

逆に大湯式を否定し、十腰内Ⅰ・Ⅱ式の範疇で捉える鈴木克彦氏の研究（鈴木2001）もあるが、ではその分布域は山形県まで含まれてしまうのだろうか。

さて、これらの研究を踏まえてかっぱ遺跡出土の該期の土器（図2・3）を検討してみたい。

図3-20の浅鉢以外は本間氏の第5段階、その中でも大湯式として扱われるものに該当する。ただしこの段階での片口土器は出土していないが、いずれ県内でも出土する可能性は十分ある。また、秋元氏の大湯Ⅱ式、金子氏の大湯式（古）のなかでも第4段階と大湯式（新）の第5段階が該当する。かっぱ遺跡で出土する南境Ⅱ式より古い様相を持つ土器が村山市川口遺跡（図10）、戸沢村津谷遺跡（図13）などで出土しており、それらは金子氏の大湯式（古）の2段階細分の内の古い方（第3段階）に相当する。つまり、かっぱ遺跡の該期の土器群は南境Ⅱ式の中でも新段階として考えられる。

文様は図に示したように多様であるが、中でも入組文がこの時期に限らず、かっぱ遺跡土器群の文様の中心になる。

文様は3本の沈線で描出され、中に縄文が充填される。入組文を中心としており本間氏・金子氏の大湯式の定義にも当てはまる。やはり山形県内でもこの段階以前の土器に系統性を持っておらず、十腰内Ⅰ式とは分布を異にする土器である。ただし、その成立には北東北の型式である十腰内Ⅰ式の影響が強いことは明らかである。更に金子氏は大湯遺跡の位置的問題に触れ、大湯式と十腰内Ⅰ式が混在する秋田県北部の遺跡の名称を型式名として冠するのは好ましくなく、将来的には名称を変更すべき（金子1995）とも述べている。

本稿では前段でも述べたように、東北南半部の土器群を関東の土器編年に照らし、併行関係から位置付けを行う立場なのでこれらの土器は南境Ⅱ式となる。

時期については秋元氏（秋元1986）のほかに、後藤勝彦氏（後藤1974）によれば、南境貝塚出土のC群土器と

分類されたものに該当し、堀之内Ⅱ式に併行するとされている。またこのC群を南境式と呼ぶことを提唱している。

かっぱ遺跡では遺構内での共伴関係を明示することはできないが、いわば状況的な証拠となる土器が図3-20の堀之内Ⅱ式の浅鉢であると言える。この浅鉢は出土量が非常に少ない上に、他器種との共通性に欠けており、客体的に存在するものである。対応する主体となる土器群は南境Ⅱ式であろう。両型式には共通性が乏しく、併行関係は認定しがたい。しかし、先行型式である南境Ⅰ式は堀之内Ⅰ式との共通性が多く、後続の宝ヶ峯Ⅰ式は後述する折衷土器の存在から加曾利BⅠ式併行であることは動かさない。よって堀之内Ⅱ式には南境Ⅱ式を併行させるのが適当であると判断した。

この段階での東北地方の土器の文様は、前段階では展開方向が縦であったのに対し、横に変化することが指摘（後藤1974・本間1985）されている。この変化は関東地方の堀之内Ⅱ式でも指摘（磯崎1964）されており、併行関係を示唆するものと考えられる。この浅鉢に見られるように、山形県では当時期においても関東地方と密接な関係が窺える。将来的に共伴関係が明示できる資料が得られることを期待したい。

宝ヶ峯Ⅰ式（加曾利BⅠ式併行）

前項では土器の具体的な特徴についてはあまり触れなかったが、この項で宝ヶ峯Ⅰ式と比較しながら検討したい。土器を構成する器形や文様などの各属性の変化に注意し、先行型式から引き継がれるものと後続型式に顕著になるものなどの推移を捉えながら行う。古い段階の属性を新しい段階の属性が競合しながら駆逐していく（横山1985）と考えられるからである。

宝ヶ峯Ⅰ式の傾向を簡潔に述べれば、先行型式からの系統を持つ十腰内Ⅰ式系土器の退化過程と、Ⅰ文様帯とⅡ文様帯の境界の明確化、次段階で顕著になるⅡa文様帯の出現を予想させる口縁部の変化、そして加曾利BⅠ式系土器の出現などが挙げられる。

図4・5・7-15・26は前段階の退化形態と本間氏が指摘（本間1985）している氏の第6段階に、また金子氏の大湯式（新）のなかでも新しい方である第6段階と新山権現社Ⅰ式の一部⁴⁾に相当する。

本間氏（本間1985）の述べたとおり、文様は前段階か



図2 かつば遺跡 南境2式(堀之内2式併行)の土器(1)

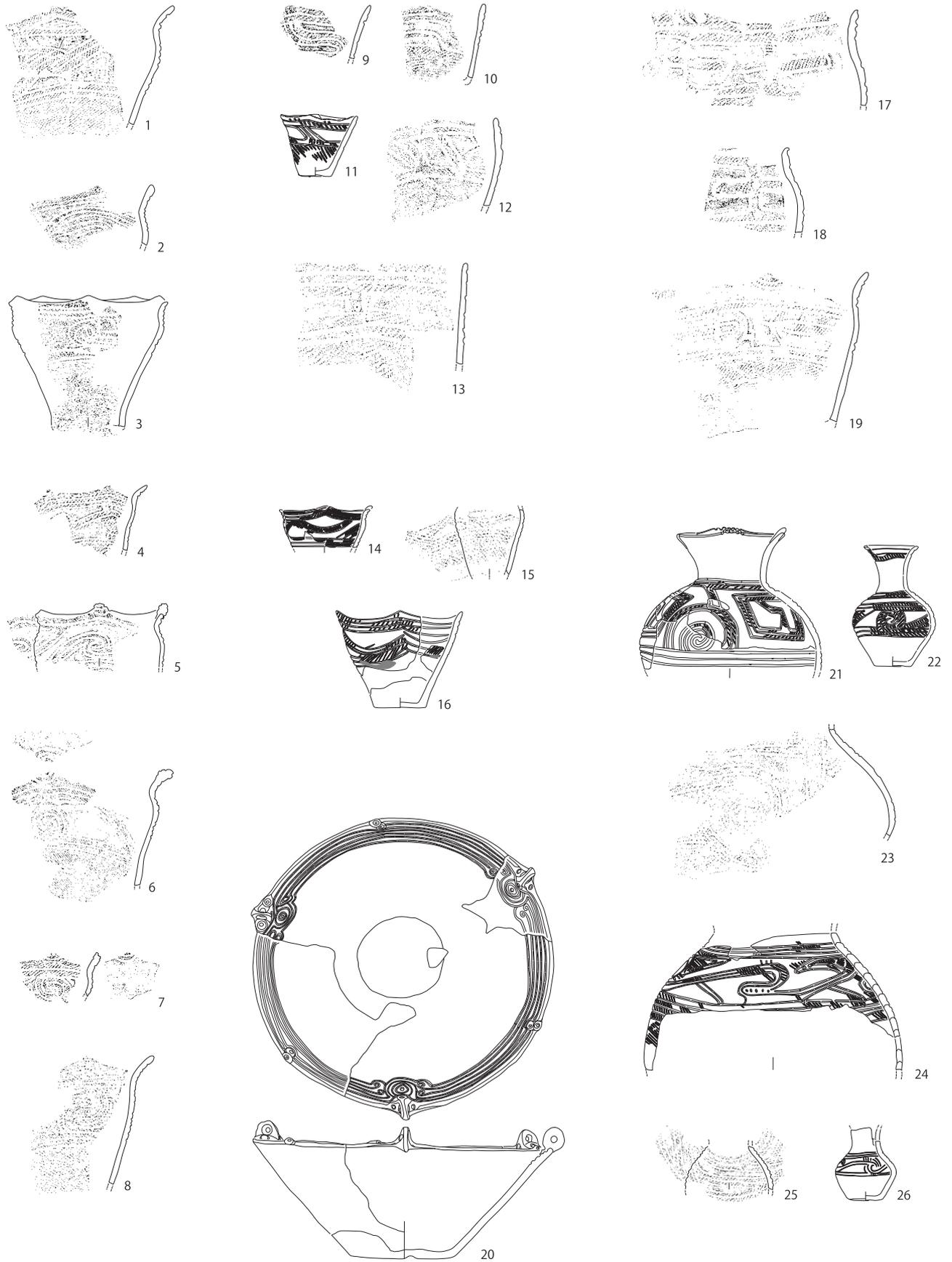


図3 かつば遺跡 南境2式(堀之内2式併行)の土器(2)



図4 かつば遺跡 宝ヶ峯1式(加曾利B1式併行)の土器(1)



図5 かつば遺跡 宝ヶ峯1式(加曽利B1式併行)の土器(2)

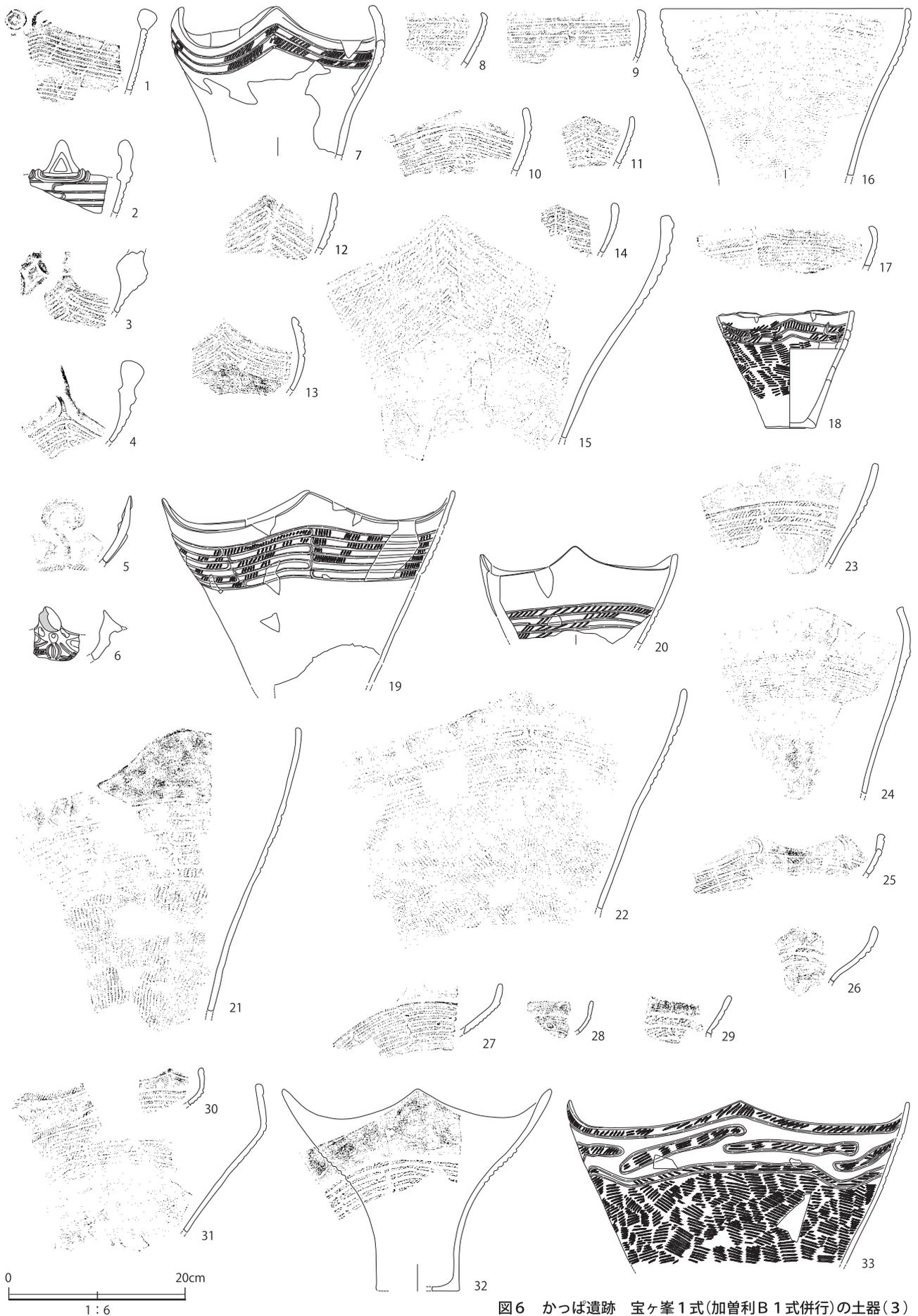


図6 かつば遺跡 宝ヶ峯1式(加曽利B1式併行)の土器(3)

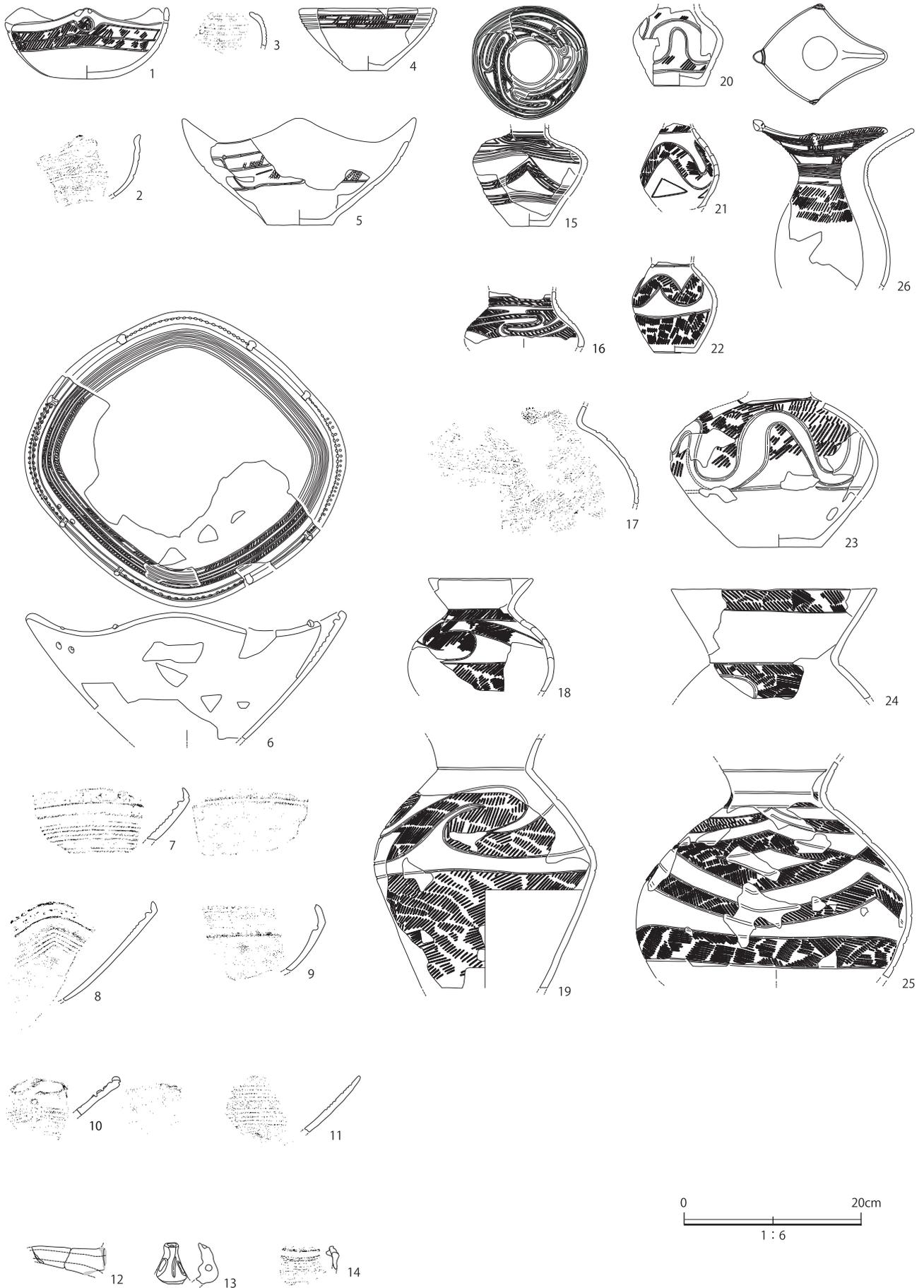


図7 かつば遺跡 宝ヶ峯1式(加曽利B1式併行)の土器(4)

ら簡略化されている。口縁部の文様には地文のみのもの(図4-1・7、図5-8など)、多条沈線文が施されるもの(図4-3・20、図5-3など)、連続刺突文を多段に施文するもの(図4-2・5・8・14・17・19、図5-1・2・10・11など)などがある。多条沈線文と連続刺突文は図4-9・16に見られるように同時に施文されることがある。

体部の文様が3本の沈線で施文されるもの(図4-7、図5-7)は、先行型式の手法を残すものと考えられ宝ヶ峯1式の中でも古相に当たる。文様が2本の沈線で施されるもの(図4-8、図5-1・2など)は充填縄文が加えられる。ほかに多条沈線を充填するもの(図4-2・13・14、図5-3・14・15など)も存在する。

体部文様は先行型式から簡略化されたものばかりであるが、図5-1・2・4、図7-15~19の入組文、図5-10・11、図7-25の幾何学文は後続の宝ヶ峯2式で再び盛行する充填縄文で描かれている。他種の文様は充填縄文が施されることがほとんど無く、文様自体も後続型式まで継続しない。一様に退化形態を示すのではなく、同時に後続型式につながる要素が生成しているのである。

地文では図4-21・22のように、加曽利B3式併行の土器群に看取される同一原体を異なる方向に転がした羽状縄文が施文されることがある。

文様帯については、南境2式ではI文様帯とII文様帯が完全に分化せず、文様自体も有機的に結合していたが、この型式では両者が完全に分化した様相を示している。ここには器形の変化が大きく関わっている。つまり口縁部が先行型式ではなだらかに外反していたのに対し、強く外反、あるいは屈曲しているのである。そしてこれらの土器のほぼ全てが、屈曲部の内面に先行型式では見られなかった明確な稜を持つようになっている。この外反、あるいは屈曲がI文様帯とII文様帯の間の境界であると考えられる。

金子氏によると、口唇部の突起が大湯式(新)の特徴になり得る(金子1998)という。金子氏の大湯式(新)は南境2式と宝ヶ峯1式にまたがる部分に相当するので、同様の特徴はかっぱ遺跡では南境2式から確認できる(図2-11・23、図3-4~7・19)。壺形土器(図3-21)では口唇部に刻目が加えられることもある。入組文を持つ土器に多い特徴のようである。

宝ヶ峯1式では、その突起はやや発達した状況が認められる(図4-5・9・10・15・19・22・25~27、図7-26など)。図4-27は一箇所に突起が2つ付されている。形態は大きく異なるため、その影響の度合いは判然としないが、口唇部に突起を持つ土器は併行関係である堀之内2式・加曽利B1式にも存在している。これらの突起は後続型式で更に大きく発達することになる。

器形の変化では口縁部の強い外反のほかに、体部上半部の膨らみの減少が見出せる。波状口縁の単位数も先行型式では4・5・6単位のものが見られたが、3・4・6単位に変化する。

図4下段(13~16、21~27)の土器が宝ヶ峯1式の中でも新しいと考えられるものの一部である。その特徴は口縁部直下に横位沈線が1条施されることにある。既に確立しているI文様帯とII文様帯の分化から一歩進み、IIa文様帯の創出に関わるものである。口縁部直下の沈線と頸部の屈曲により頸部は上下に限られた空間となり、新たな文様帯を生み出す要因になると考えられる。この空間が更に広がり、図8-6・7・13などに繋がっていくのである。この頸部の空間を限定する沈線は、併行関係にある加曽利B1式系土器の図6-30・31にも認めることができる。

図6に提示した口縁部に平行沈線文を持つ深鉢は、十腰内II群a類(今井・磯崎1968)と加曽利B1式に類似したものである。両者の併行関係は今井・磯崎氏が指摘している。口縁部直下に施された平行沈線文が次第に下方向に移動し、口縁部に無文帯が出現、その無文帯が更に広がっていくことが知られている(鈴木1996)。

しかし、これらの土器群は十腰内II群a類とほぼ同じであっても、関東地方の加曽利B1式とは異なる点もある。突起の形状や、波状口縁の形態、口縁部が大きく広がる器形、平行沈線文を区切る縦方向の沈線の施文手法などである。また、内面に沈線などの文様を施す深鉢がほとんど見られないことも挙げられる。

それに対して関東地方の加曽利B1式そのものと言える土器が、図7-6~11の浅鉢であり、やはり客体的な存在である。他の器種は先行型式からの系統である十腰内I式系であったり、十腰内II群a類のように加曽利B1式に類似しながらも異なる点も持っていたりするのに対し、浅鉢だけは南境2式の浅鉢(図3-20)の場合と同

様に東北地方の土器とは明らかに異なっている⁵⁾。おそらく図6の平行沈線文を主文様とする深鉢は、最も古い様相を持つ図6-1の段階で関東地方から影響を受け、早い段階で在地化し独自の発達を遂げたものではないだろうか。だとするとその出土量が十腰内I式系土器に匹敵することも首肯できる。

ほかに、図7-12~14の注口土器も客体の可能性があるが、小破片の資料のみなので今回は保留とする。

図6-5・19~32の口縁部の無文帯が大きいものなどが、この型式でも新しい段階である。ほかに図6-3・4・6も装飾突起の形状から、新しい段階に含められる可能性がある。図6-32は次型式で顕著な円筒形の体部を持つ。30・31は前段でも述べたが、口縁部直下に沈線が1条施されるようになり、II a文様帯の出現直前の様相を示している。十腰内I式系土器と加曽利B1式系土器はその出自は異なるが、後者が在地化したことにより変化の動態も近似してきたものと考えられる。図6-33などの器形はこれら加曽利B1式系の深鉢に近いが、文様などは充填縄文手法であり、口縁部・体部に縄文を施すなど十腰内I式系土器に近い。同じ遺跡で出土した土器であり、相互に影響を及ぼすことも当然考えられることである。

宝ヶ峯2式(加曽利B2式併行)

「文様帯系統論」の提唱者である山内清男氏は、加曽利B2式頃にII a文様帯が出現すると述べている(山内1964)。また、特に東北地方の後期後半に顕著であるという。宝ヶ峯2式はII a文様帯をその特徴とするものを中心に分類した。図8-13・14などは図4-26・27などの宝ヶ峯1式に続くものである。先行型式に比べ口縁部が立ち上がり、頸部の上下幅も広くなり、II a文様帯の空間が確保されている。文様自体は無文であるが、この無文帯と空間の確保を最大限に評価し、II a文様帯の成立の条件が全てそろったことをもって宝ヶ峯2式に位置付けた。口縁部破片だが、図8-7では頸部に文様が施されている。

十腰内I式系土器は宝ヶ峯1式段階で退化するものと、新たな発展の方向性を得たものの二つに分かれた。図8の深鉢1・2は、充填縄文手法によって施文されている。充填縄文手法自体は後続型式につながる要素であるが、文様では入組文以外は後続型式へ発展的に継続し

ない。入組文以外で充填縄文手法により施文された図5-10・11が、横位の沈線に縄文を充填するのみの図5-16・17へと簡略化が進んだ。そして、宝ヶ峯2式の図8-1・2に至るが、ついにこの段階で潰えるようである。頸部に無文帯を持つようになり、II a文様帯を施文することができるようになったものの、この器形・文様の深鉢は以後見られない。図8-2と同じ文様を施す壺形土器(図9-29)では異原体を用いた羽状縄文が見られる。

逆に宝ヶ峯1式で図5の-1・2・4のように充填縄文手法で入組文を施文される深鉢は、宝ヶ峯2式で更にII a文様帯の出現という新たな変化の方向を得て、図8-4・5のように上下二段に入組文を施文するようになった。II a文様帯の拡大に伴い、頸部と体部の境界の位置が下降し、結果的に体部の上下が短くなったため⁶⁾、文様が体部全体に施文されることになったのであろう。

次に、かつて磯崎正彦氏(今井・磯崎1968)により十腰内II群b類と分類された土器であるが、その位置付けを巡って意見が分かれている。

十腰内II群b類は磯崎氏の報告では「曲線的な文様を構成するもの」として分類された。提示された資料は写真図版に口縁部破片が1点のみで、かっぱ遺跡で最も近い土器は図8-36などであろう。その土器片に関して詳細な説明を付してあるが、その有効範囲は非常に限定されている。曲線を使った入組文、筒形の胴部に大きく開いた口縁、3つあるいは5つの波状口縁、口縁の先端には精巧な装飾把手、文様帯が口縁と胴部にあること、沈線外部の縄文を磨消した入組文、著しい特徴として沈線に沿った円形刺突文といった内容である。そしてその位置付けに関しては苦慮した様子が文中から察せられるが、「私たちはとりあえず第II群土器のなかに含めておいたが、それとても確定的なものではない」と結んでいる。そして第II群土器の時期は加曽利B1式併行としている。

また同報告書の考察において、第II群b類土器は、磯崎氏が加曽利B2式相当とした第III群土器以前に遡るものとするのが相応しいとした上で、「共通する因子は、やはり第II群土器に最も多い」と述べている。ここで第III群土器の写真図版を検討すると、口縁部に二段に施文された刻目文のほか地文は同一種類の原体を異方向に施文した羽状縄文が施されている。筆者はこれらの特徴は加

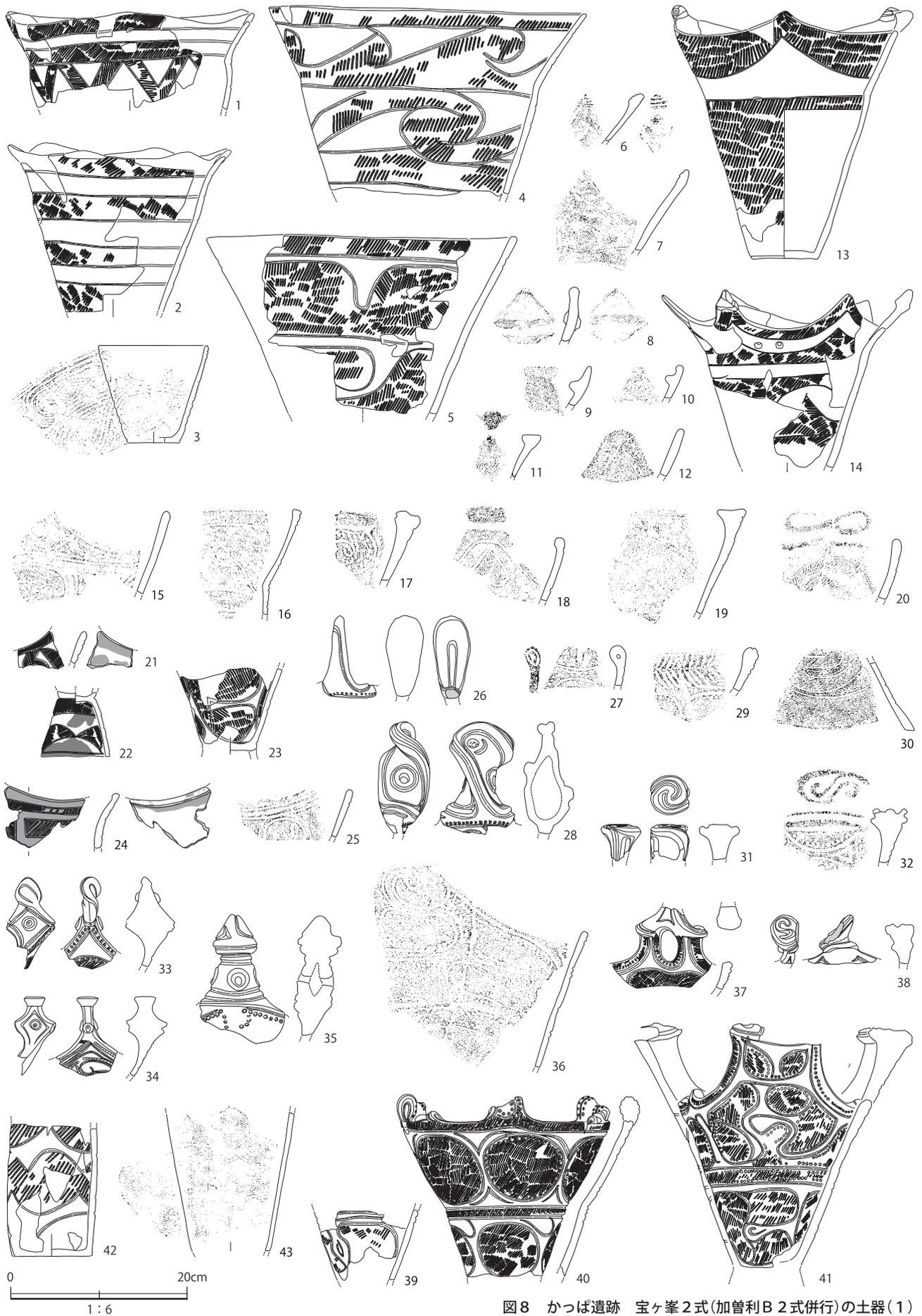


図8 かつば遺跡 宝ヶ峯2式(加曾利B2式併行)の土器(1)



図9 かつば遺跡 宝ヶ峯2式(加曾利B2式併行)の土器(4)

曾利B3式に近いと考えている。

報告書の文章を読む限りでは第Ⅱ群b類の1点の破片資料は、磯崎氏自身第Ⅱ群土器と第Ⅲ群土器のおよそ中間にある土器と考えたのではないだろう。

もう一つ筆者の理解と異なる部分は、磯崎氏が波状口縁部に発達した巨大な装飾把手が第Ⅱ群土器(加曾利B1式相当)において盛行すると述べたことである。筆者の理解では、装飾把手が最も発達するのは加曾利B2式併行の土器群である(図9-9~13)。

また、磯崎氏は第Ⅱ・Ⅲ群土器は加曾利B1・2式相当であると共に、宮戸Ⅱa・Ⅱb式の型式特徴と一致していると述べている。宮戸Ⅱ式は加曾利B式に比定(後藤1957)されるが、そもそも2細分の宮戸式と3細分の加曾利B式では整合性を持たない(鈴木2003)。十腰内第Ⅱ・Ⅲ群土器に宮戸Ⅱa・Ⅱb式を比定したのはおおよそ正しいと言えるが、それらを加曾利B1・B2に併行させたために、十腰内第Ⅱ群b類土器は第Ⅱ・Ⅲ群土器の中間に位置付けるべきであることを理解しながらも、行き場を失い、消去法によって何れかに収めるしかなかったのだらうと推測される。

磯崎氏が提示した資料のみから検討すると、十腰内Ⅱ群b類は加曾利B1式併行の第Ⅱ群土器と加曾利B3式併行の第Ⅲ群土器の中間、加曾利B2式併行となるものと考えられる。

金子昭彦氏も「磯崎氏がなぜ十腰内Ⅱ群b類を加曾利B1式相当に位置付けたのであろうか」と疑問を投げかけた(金子1993)。氏は十腰内Ⅱ群b類を、Ⅱa文様帯の評価から新山権現社2式(加曾利B2式併行)に相当すると述べている。

鈴木克彦氏は関東地方の土器編年と安易に対応させることに批判的な立場なので、併行関係については言及していないが、論文中の変遷図(鈴木2003)を見ると、十腰内Ⅱ群b類⁷⁾は加曾利B1式併行の土器と同じ段階に位置付けており、磯崎氏と同じくⅡ群a類とb類を同時期の所産としているようである。

また、鈴木氏(鈴木1996)は十腰内2式b類⁸⁾の主体は東北地方北部にはなく、むしろ南半部に主体のあるものと考えている。氏の十腰内2式土器の分類ではb類は曲線的な文様を構成するものとされており、適用される範囲は非常に広い。筆者は他県の事情に疎いので、果た

して東北地方南半部に主体があるのかどうかは判断しかねるが、山形県内ではa類もb類も出土している。その中ではa類の成立過程を示す資料は見出せないが、磯崎氏のⅡ群b類、鈴木氏の「華燭な土器」の成立と変化の過程を考察できる資料は出土している。

図8-36・40・41などが磯崎氏の十腰内Ⅱ群b類、鈴木氏の「華燭な土器」に相当するもので、かっぱ遺跡で出土するこの種の土器では最新の段階のものである。後述するが、40は既に退化の過程に入ったものである。

それでは、これらの土器の存在に不可欠な要素を幾つか抽出し、それらを先行型式と同型式の土器群の中に求めてみたい。

まずは器形だが、基本的には図8-13・14などの深鉢の延長にあると考えられる。頸部がくびれ、口縁部が直線的に外傾して開く器形である。3単位の波状口縁は13に見られる。14は6単位の波状口縁であるが、波頂部に突起が付くのはその内3単位のみである。

図8-41の波頂部は幅広でかつ内・外面に強く肥厚している。図8-9~11などの波頂部の資料があるが、これらが付く器形は図8-13・14などであろう。これらの波頂部が更に発達し、図8-18・19などの変化を経て41に至ったと考えられる。

台部が付くのがこの種の土器の特徴である。これは他の深鉢には認められないが、図9-22・24などの台付鉢・浅鉢が存在する。また、岩手県盛岡市の蔭内遺跡や同じく平泉町の新山権現社遺跡などでは南境2式と同じ段階から台付鉢や台付浅鉢が出土している。器形は異なるが、同じ系統の土器である。

そして発達した装飾突起は先行型式の加曾利B1式系土器(図6-1~6)に見られる。これらはそのまま同系の土器群に引き継がれるが、やはり与える影響⁹⁾は大きかったのであろう。図8-33の装飾突起の上半部は図9-9・10に、下半部は図6-3などに近い。また、両系統とも装飾突起はひねりが行われることが多い。更に図8-33・34の波頂部は、通常は台形であるが、山形を呈している上、口縁部は内湾して立ち上がる器形であることから、加曾利B1式系の深鉢の影響を受けている可能性がある。

十腰内Ⅰ式系でも、南境2式段階から波頂部に装飾は加えられている。

図8-40は平口縁で三つの突起とその間に小突起が付されているが、図8-41などの土器からの退化を示すものと考えられる。

次に文様であるが、やはり入組文が施文されることが多い。長期間に亘り主要な位置を占めてきた文様であるが、この型式で衰退する。図8-41の上段に施文された文様は複雑化しているが、やはり入組文である。極限まで発達した文様は長続きせず、図8-40では円文に置換されている。

また、図8-17の入組文には沈線が棘状に突出する部分があるが、図8-41の体部下半文様の中心部に見られる釣り針状の文様なども、主文様に属する付加的な文様という意味では同類であろう。図8-39・40にも見られるが、主文様の隙間に付加的に行われるため、沈線の文様は多様である。この施文は図8-18~20には見られず、新しい要素と言える。

図8-32の口唇部や図8-38の装飾突起上面に見られるS字状の文様は、図8-20の口唇部の「8」字状文や、加曾利B1式の浅鉢(図7-10)に辿ることができる。

沈線で描かれた文様に円形刺突文を沿わせる施文方法は、図8-18~20には見られず、発達過程の中でより装飾性を増すために付加されたものと考えられる。図8-12には沈線と刺突が併走しているが、刺突の間隔はまだまばらである。沈線と刺突を併用する手法自体は先行型式から頻繁に認められている(図4-10・11、図5-3・11など)。図8-40のⅡa文様帯とⅡ文様帯の境界の縄文帯に施される円形刺突文は、図8-41では2列であるが、1列に退化している。

最後に文様帯の特徴では、Ⅱa文様帯とその拡大に伴い狭小化したⅡ文様帯全面に対する施文が挙げられる。図8-13・14でⅡa文様帯を拡大した後、図8-7では既に文様が施文され、図8-18などに継続する。また、この特徴は器形の変化と不可分であり、口縁部が立ち上がり、Ⅱa文様帯が拡大すると同時に頸部の屈曲も弱くなり、場合によっては屈曲を持たないこともある。上下二段に入組文を施す手法を持つ図8-4・5などからの影響も大きいと考えられる。またⅡa文様帯とⅡ文様帯の両者を二分する幅広の縄文帯は、ネガとポジが逆転しているが、図8-14に求めたい。

図8-4・5のⅡa文様帯とⅡ文様帯では、明らかに

Ⅱa文様帯の文様の方が、簡略化が進んでいる。両者の文様が同段階に存在し得る証明になるほかに、文様帯の重点がⅡ文様帯に置かれていることが分かる。ところが、図8-40・41ではⅡa文様帯の方がより発達するようになる。円形刺突文が施されるのもⅡa文様帯だけである。この段階では文様帯の重点がⅡa文様帯に移行したように思われる。

磯崎氏に「元来特殊な土器」(今井・磯崎1968)と言われた十腰内Ⅱ群b類も各要素に分解すれば、その存在に不思議なところは見られない。多少飛躍はあったかもしれないが、確かに東北地方南半部にその成立の一端は認められるようである。

かっぱ遺跡で出土する宝ヶ峯2式がその終末部分まで含むかどうかは、後続する加曾利B3式併行の宝ヶ峯3式と併せて検討しなければならないのだが、図8-40・41などの土器の存続期間はこの型式までであろう。加曾利B3式併行段階の土器は詳しく検討していないが、やはりその中には存在していない。極限まで発達した土器は長続きしないのであろうか。しかし、その全てが失われてしまうのではなく、やはり部分的に引き継がれる要素はある。以下に述べる加曾利B1式系土器の検討で明らかにしたい。

図9上半(1~17)の土器が、加曾利B1式系の深鉢である。時期的には加曾利B2式併行となるが、先行型式の加曾利B1式系土器の系統に存在するものと考えているため、「加曾利B1式系」と呼ぶ。やはり十腰内I式系土器と同様にⅡa文様帯の出現、発達した装飾突起をその特徴とする。波底部に装飾部を持つことも共通した要素である。

宝ヶ峯1式の図6-32に見られる円筒状の体部は図9-13に引き継がれる。13の装飾突起は欠損しているが、9~12・14に類する突起が付いたものと推察される。口唇部は内側に大きく肥厚し、口縁部も内湾するが、13をピークとして、やはり退化形態と想定される15に至る。波頂部の装飾突起は無くなり、同じ構成である文様も、器形も簡略化され、作出も粗くなる。

平行沈線文の施文位置が下降したため、Ⅱa文様帯は十分な空間を持つが、波頂部の下に面違いの弧線文と波底部の装飾部が下位に延長するのみである。この図9-13に代表される深鉢にも新たに発展的な変化の方向性は

現れず、図8-40・41などと同様にこの型式内で途絶えるものと考えられる。ただし、例外が王ノ壇遺跡(宮城県仙台市)などに若干存在する。加曽利B3式併行の新たな要素である複数段の刻目文などを加え、その命脈を保っている。

逆に新たな方向性を持つ土器が図9-1~5である。東北地方北半部の十腰内2式では文様a類(平行線的な文様)とb類(曲線的な文様)は同一個体に併用されることはない(鈴木1996)ようであるが、宝ヶ峯2式には図9-1のようにⅡa文様帯に弧線文を持ち、Ⅱ文様帯に平行沈線文を持つ土器が存在する。十腰内I式系の土器と加曽利B1式系土器の要素を併せ持つのである。

器形では、内湾しながら大きく開く4単位の波状口縁は後者の、頸部にくびれを持ち体部上半がやや膨らむ器形は前者の影響によるものと見られる。あるいはより単純に後者の器形に前者のくびれのみを加えたものの可能性もある。

文様ではⅡa文様帯に、連続する上弦の弧線文と同じく連続する下弦の弧線文を上下二段に施文している。同じ文様は県内の先行型式の中では見出せないが、宝ヶ峯2式の中でも古相である図8-13・14の頸部、あるいは14の体部の弧線文などに求められるかもしれない。Ⅱ文様帯の平行沈線文の存続期間はこの土器の段階でおそらく最後である。

宝ヶ峯2式を特徴付ける文様に上記のような弧線文を挙げられるが、幾つかの種類がある。そもそも筆者は、図8-14のⅡ文様帯のような弧線文は図7-20~22の壺形土器で見られるように入組文から施文方法を簡略化させることによって出現した文様と考えている。つまり、入組文自体は図8-4・5、図9-27のように単純に簡略化する方向と、図8-36・41のように極度に発達する方向、そして、先の壺形土器のように弧線文として新たな展開を見せる方向に分かれたのである。弧線文は図9-1~5・19のようにさまざまな変化を遂げ、後続型式の主要文様の一つになる。図9-3・5で見られるようになる縦位の弧線文については図9-13の波頂部直下に施文された面違いの弧線文と無関係とは言えないであろう。また、この弧線文を施文された図8-14、図9-1の土器は後続型式以降の原型になると考えている。

関東地方の加曽利B2式で顕著な文様である斜沈線が

施された浅鉢(図9-21)も出土している。天童市渡戸遺跡(図12-6・30・31)でも若干出土している。先行する南境2式、宝ヶ峯1式でも同じ現象が見られたが、浅鉢は他の器種とは異なる文様を持つことが多い上、数も少なく客体的な存在を示している。

図9-33の注口土器は頸部と体部の境界に、凸湾したⅡb文様帯を持つもので、東北地方の後期中頃に認められるものである(山内1964)。ほかにも図9-16などの深鉢でもⅡb文様帯を持つ可能性があるが、破片資料のため確定できない。

4 山形県内出土の後期前半の土器

ここまでほぼかっぱ遺跡の出土土器のみで、3型式に亘る型式の変化を解説した。今回扱う資料は山形県内の土器に限定しているが、かっぱ遺跡の豊富な資料は、1遺跡のみである程度の型式変化の追跡を可能にしていると判断したため、敢えて他の遺跡の資料は扱わなかった。系統・器種を問わず土器を構成する要素を抜き出し、再構成して変化の道筋を説明した。それでも広範囲の遺跡を扱わず1遺跡の出土土器のみであるため、最も影響を与え得る可能性の高いもの同士での比較を行えたのではないだろうか。

ここではかっぱ遺跡の編年をもとに、県内の他遺跡の出土土器を検討し、先に述べたかっぱ遺跡の編年を検証してみたい。これにより土器の変化の動態は、更に複雑な様相を見せることになるろう。

川口遺跡

山形県の内陸部の中央に位置する山形盆地の北端の村山市大字富並に所在する縄文時代後期前半の集落遺跡である。竪穴住居跡13棟、墓壇45基(石棺6基含む)、土壇・柱穴1500基以上、集石遺構などが検出(阿部1990)された。

出土遺物は整理箱で305箱、内土器が265箱であるが、報告されたものは遺構内出土の遺物と包含層出土遺物の一部である。未報告資料が多くを占めるため遺跡全体での土器の概要は判然としないが、まずは報告された土器だけでも検討したい。

図10に提示した資料が報告書から抜粋した実測図である。南境2式(1~15)・宝ヶ峯1式(16~20)・宝ヶ峯2式(21~30)に該当する遺物が出土している。他に南

境1式が若干出土している。時期的にはかっぱ遺跡とほぼ同じと見なされる。

南境2式はかっぱ遺跡よりやや古い様相である。体部の文様帯が比較的広く、文様も若干複雑である。波状口縁の単位数も7単位のもの存在している。かっぱ遺跡と同様に堀之内2式の浅鉢(図10-15)が出土している。数量は明らかでないが、やはり客体として存在していると見て良いであろう。

提示された宝ヶ峯1式に該当する資料は非常に少ないが、内容はかっぱ遺跡と同様の土器である。ここでも加曽利B1式の浅鉢(図10-19・20)が出土している。

宝ヶ峯2式の土器では図10-24の台付深鉢が注目に値する。図9-3・5の弧線文に近い文様がⅡ文様帯に施文されており、同時性の証左となる。

また、Ⅱa文様帯とⅡ文様帯間の横位に施された沈線に沿う上下二段の円形刺突文が非常に近接しており、後続型式で見られる2段の刻目文に発展する可能性を窺わせる。また、図10-23では円形刺突文ではなく縦長の刺突文に、図8-34では連続した角押文に置換されている。大半は円形刺突文が施文されるが、決して不変のものではないと言える。

壺形土器図10-29・30の弧線文と簡略化した入組文の同種の文様を、上下2段に施す点は、図8-4・5・40・41などの深鉢と共通する。

渡戸遺跡

同じく山形盆地の中央、天童市大字山口に所在する遺跡である。出土遺物は整理箱で229箱、内95%は遺物廃棄場からの出土である。遺物のほとんどは後期のものと報告(山口ほか1995)されている。その内容は宝ヶ峯1式と2式に分けられる。

図11が宝ヶ峯1式とした土器群である。1～8が十腰内I式系土器、9～21が加曽利B1式系土器である。9は内面にも平行沈線文が施文される。12～14は屈曲する頸部を持ち、十腰内I式系土器の影響が想定できる。18～21の浅鉢は加曽利B1式に非常に近い。20の「の」字文は関東地方でよく見られる文様であるが、東北地方ではほとんど見られない。これらの浅鉢は出土する量も少なく、他器種との共通性に欠けるので客体的な存在と分かる。

図12には宝ヶ峯2式とした土器を提示した。注目すべ

きは19の台付深鉢である。前段で図8-41などの十腰内Ⅱ群b類の成立を図8-13や14からの変化で説明したが、図12-19は中でも器形を大きく変えずに発達したものと言える。十腰内Ⅱ群b類はⅡ文様帯にも全面的に文様が施文される。図12-19は、Ⅱa文様帯があまり拡大しなかったためⅡ文様帯が広いままであり、横に展開する入組文では全面施文することが困難であるため、入組文を縦に展開させることでⅡ文様帯に全面的に施文することが可能になった。縦に展開する文様は後続型式で普遍化する要素である。図9-20や図12-5にも認められる。

図12-24の弧線文も図9-1～5などと同種の文様である。24は十腰内Ⅱ群b類の仲間であり、異系統土器の同時性と与え合う影響の大きさを示している。

十腰内Ⅱ群b類はやがて簡略化が進み25・26のように文様も単純になる。26では文様を上下二段に施文しなくなるが、19と同様に文様を縦に展開させて器面全体に文様を施文している。

津谷遺跡

最上地方の西端で、庄内地方に接する戸沢村大字津谷に位置する遺跡である。堅穴住居跡1棟、立石遺構4基、ほかにフラスコ状土坑、埋設土器遺構が検出され、遺物は64箱、内土器・土製品が38箱と報告(小関ほか1997)されている。

出土した土器は南境1・2式の土器が多い。内面に格子状の沈線を施した粗製土器が出土している。南境1式が非常に少ないかっぱ遺跡ではそのような土器は出土しておらず、南境1・2式が主体の津谷遺跡で少量ではあるが出土していることから、おそらく南境1式の段階に見られる特徴なのであろう。

図13上段(1～6)が津谷遺跡の出土土器の中で南境2式に位置付けた土器である。頸部にⅡb文様帯(本間1985)を持ち、また文様も川口遺跡のものと比較するとやや複雑である。頸部の文様帯は後続型式でほぼ消滅することから、2・3の土器などは南境2式でも古相に位置付けられる。これらの土器は川口遺跡より若干古いものと考えられる。

小山遺跡

内陸部南半の長井盆地中央部に位置する長井市九野本に所在する遺跡である。古代の集落遺跡であるが、遺構

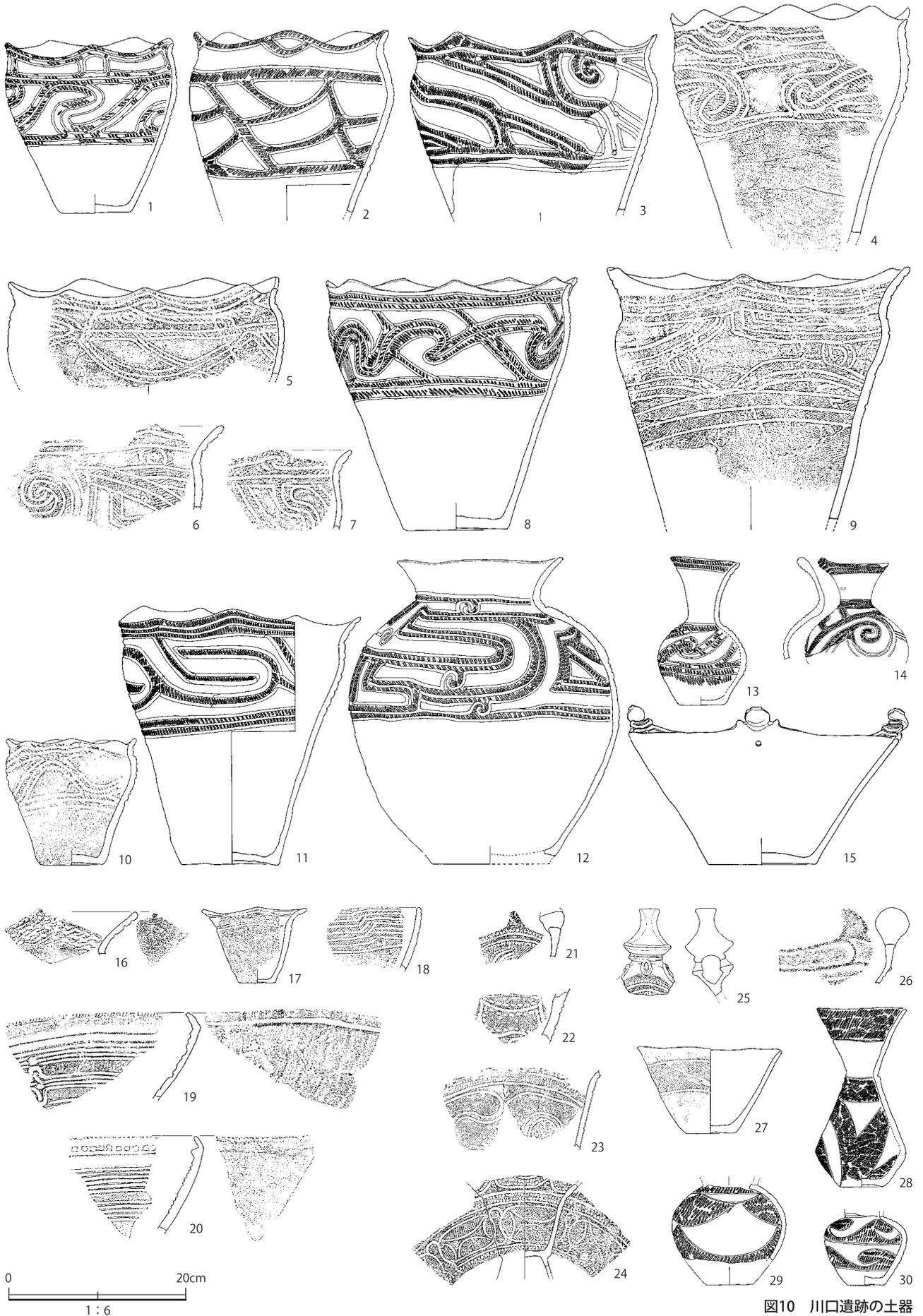


図10 川口遺跡の土器



0 20cm
1:6

図11 渡戸遺跡 宝ヶ峯1式(加曾利B1式併行)の土器

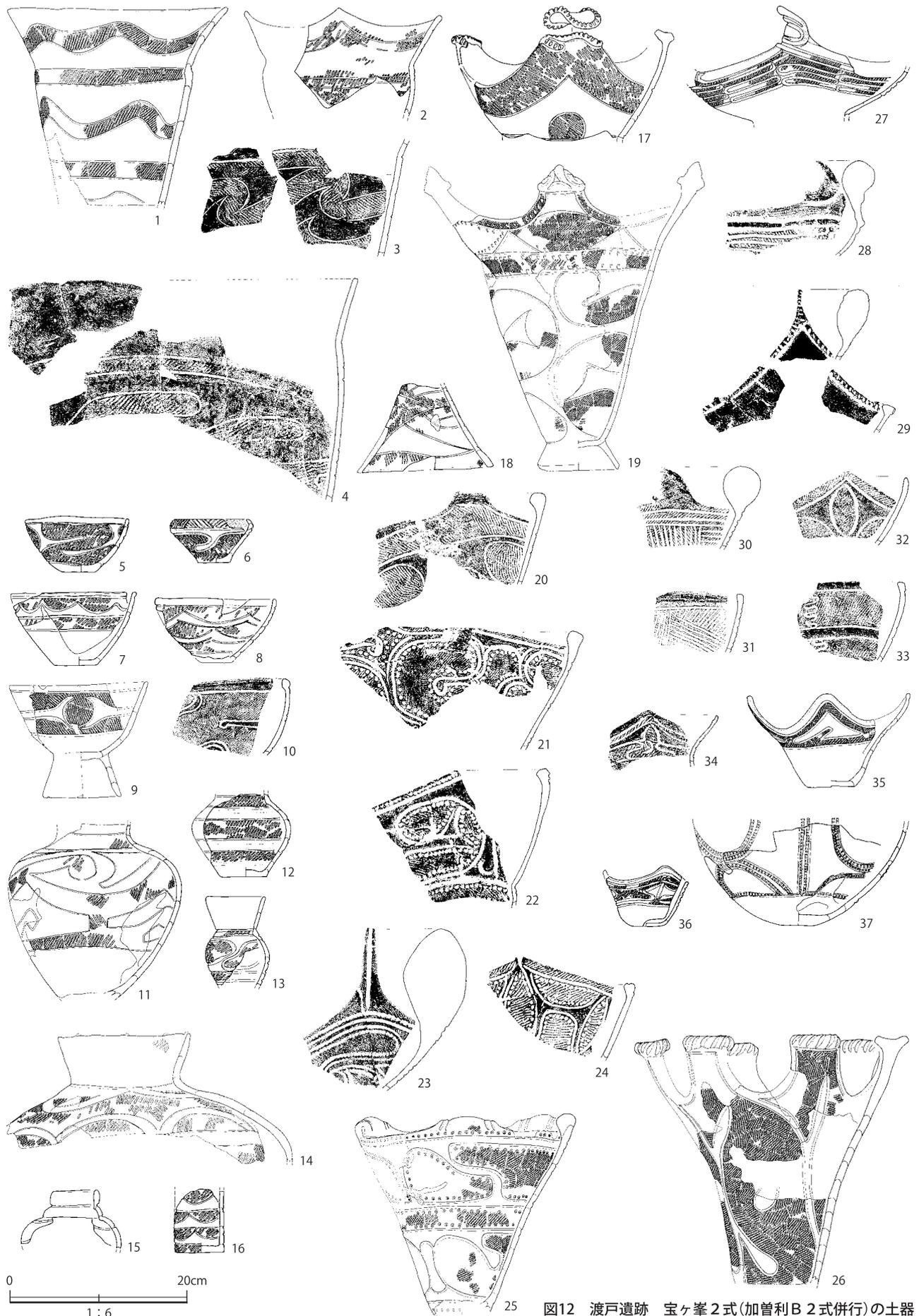
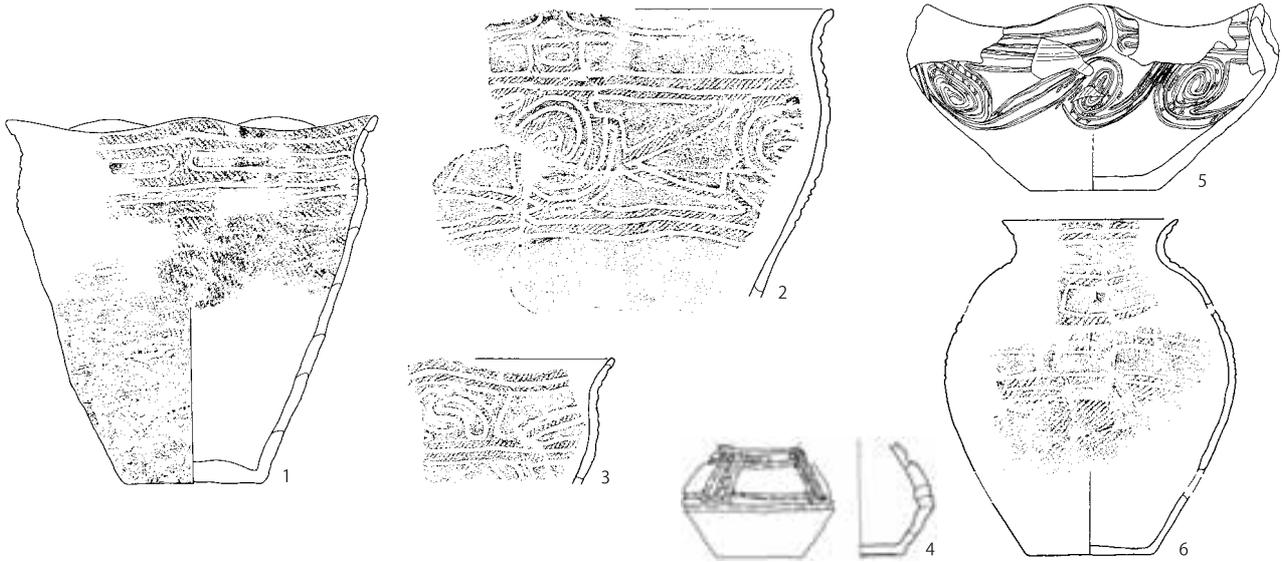
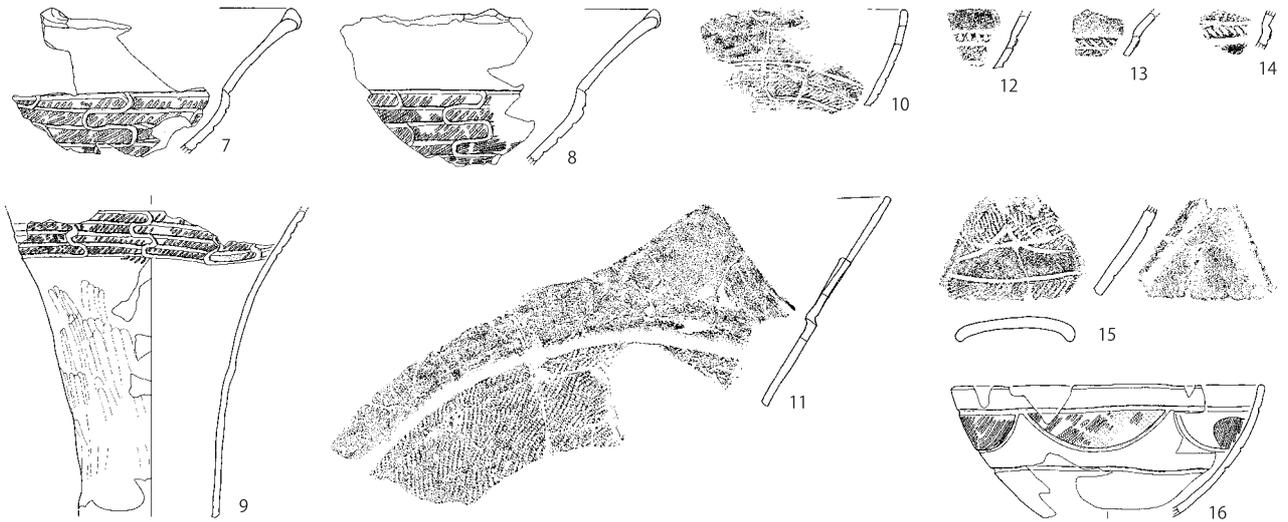


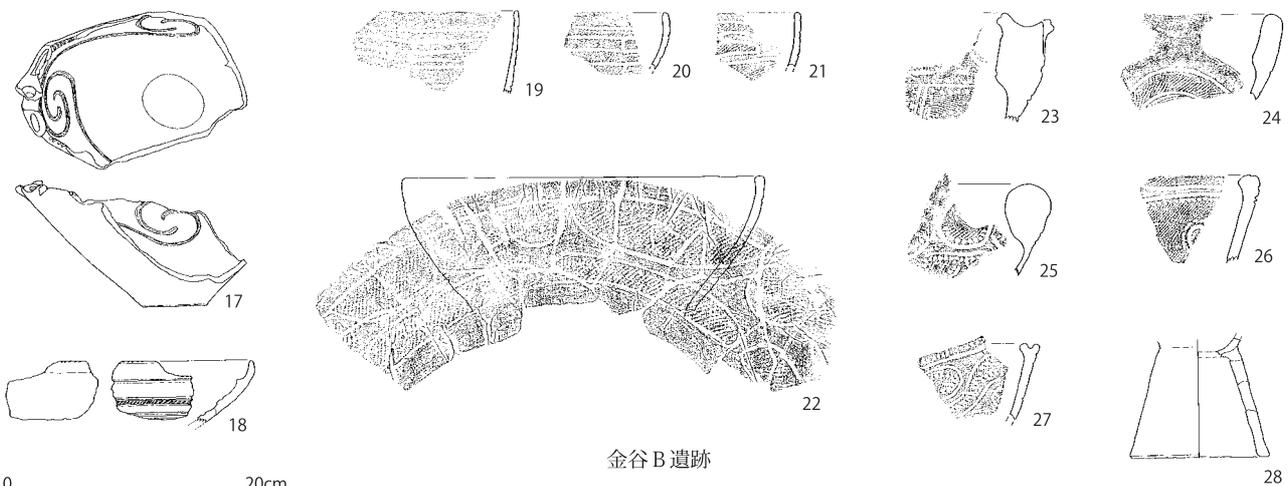
図12 渡戸遺跡 宝ヶ峯2式(加曾利B2式併行)の土器



津谷遺跡



小山遺跡



金谷B遺跡

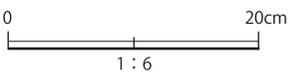


図13 津谷・小山・金谷B遺跡の土器

に伴わない縄文土器が1箱出土し、いずれも同じ時期のもので報告(福澤ほか2002)されている。

図13中段(7~16)が出土遺物を抜粋したものである。7・8は同一個体である。頸部にくびれを持つようになっているが、II b文様帯の可能性もある。図13-15は十腰内II群b類への発達過程の土器の口縁部で、文様は図8-7・13・14などに近似する。器形は波状口縁の両側縁が内側に反るという特徴的なものである。図13-16では弧線文も見られる。いずれも宝ヶ峯2式に属するものと考えられる。

金谷B遺跡

内陸部南端の米沢盆地の東端に位置する高畠町大字高畠に所在する遺跡である。縄文時代前期と後期中葉の遺物が出土している。また、集石土壙からは屈葬された成人男性の人骨が出土している(井田ほか1998)。

図13下段(17~28)に宝ヶ峯1・2式の土器を提示した。図13-23の口縁部破片と22の浅鉢が13号土壙第4層から共伴して出土している。

この遺跡で注目したいのは図13-17の浅鉢である。加曾利B1式の浅鉢である図13-18と口唇部の刻目文が共通している。また、一部欠損しているが突起も加曾利B1式のものに非常に近い。しかし内面の文様が明らかにそれらとは異なり、入組文を施文している。この入組文はかっぱ遺跡で言えば宝ヶ峯1式の十腰内I式系土器である図5-1~4、図7-15~19などに近く、明らかに折衷土器と言えるものである。これまで検討してきた遺跡では、内面に施文された浅鉢は常に他器種との共通性に欠け客体的な存在であったが、この浅鉢は内面の平行沈線文が東北地方の土器の中心的な文様であった入組文に置き換わっている。十腰内I式系と加曾利B1式系がこのように融合するのは図9-1のように宝ヶ峯2式段階と考えていたが、山形県でも南部の方ではその現象が1型式早いことが分かる。かっぱ遺跡の宝ヶ峯1式の図6の33でもその可能性を指摘したが、こちらの浅鉢の方がより具体的であると言えよう。つまりこの両系の融合は既に宝ヶ峯1式段階で始まり、同2式で顕在化したものと考えられる。

4 系統と変遷

型式の変遷はしばしば生物学の系統樹に例えられてき

た。ならば土器も発生から進化・退化・分化・交雑などと変遷し、系統によっては途絶えるものも存在するのであろう。本論ではこれらの概念を意識しながら土器型式の変遷を解釈しようと試みた。次に前節までと重複する部分もあるが、これまで検討した型式の系統と変遷をまとめたい。

十腰内I式系土器と入組文

十腰内I式系の土器は県内でも南境2式以降、宝ヶ峯1・2式でも数多く見られる。県内では十腰内I式系でも、葛西勲氏の編年(葛西1979)で言えば衰退の段階とされた第3段階のものから出土している。また、本間氏の第5段階に相当し、氏はこの段階から東北地方南半部に十腰内I式の系統を引く大湯式が成立したとしている。当然山形県もその分布域に該当し、やはり大湯式と同様の土器が出土する。更に第6段階に至り簡略化が進むとしている。つまり十腰内I式の古い段階のものは東北地方北半に分布するが、東北地方南半部の新しい段階では同系統でありながら異なる型式の様相を見せていることになる。

東北地方南半部では宝ヶ峯2式の段階で十腰内II群b類が出土している。磯崎氏により「元来特殊な土器」とされたが、先に述べたとおりこの土器は十腰内I式から系統的に発展し成立している。

図14に各型式の代表的な土器を提示した。この図をもとに十腰内I式系の土器とその主文様となる入組文について系統を追ってみたい。

南境2式段階では、十腰内I式系土器は衰退の段階であり、東北地方北半に見られるような多種の文様は見られない。徐々に簡略化されるが、図14-8などに見られるように波頂部に突起が出現しているものもある。この土器は入組文を持つが、他の文様でも同様の突起は認められる。頸部のくびれが緩やかであるため、I文様帯とII文様帯の区分が明瞭でない。

宝ヶ峯1式段階でも文様の簡略化は進む。器形では口縁部が強く屈曲し、その内面に明確な稜を持つようになり、I文様帯とII文様帯に明確に区分される。I文様帯には平行沈線文、あるいは連続刺突文を多段に施し、II文様帯には先行型式の体部文様を簡略化したものが施文されるが、図14-14の入組文は端正な充填縄文、17では入組文と円形刺突文を併用するなど、他の文様を持つ土

器とは違った様相を見せる。また、実測図では明確でないが、実物を比較すると入組文を持つ土器の方が丁寧な作出であることが分かる。

ほかに簡略化が進み体部に文様を施文せず地文だけの図14-15などの土器が出現する。他の土器のような器形の崩れも無く、3単位の波状口縁で波頂部が肥厚するという新たな発達の方向性を持っている。ここで十腰内I式系土器は衰退するものと、発達するものと分化すると考える。波頂部は先行型式の8などからの流れであろう。15の延長に18がある。波頂部の突起に発達が見られ、また口縁部直下に1条の沈線が施文される。この沈線がII a文様帯の成立の兆しであると考えている。これら14・17と15・18が後続型式の成立に欠かせない。

宝ヶ峯2式ではII a文様帯がその特徴となる。また、入組文はこの段階で3つの方向に分かれる。極限まで発達するもの、単純に簡略化するもの、そして簡略化の過程で弧線文に転じるものである。

図14-23はII a文様帯に14などから充填縄文による入組文を受け継いでいる。そして相対的に狭小化したII文様帯にも前段階から引き継ぐ文様を施文するため、そのほぼ全面に施文するようになる。

図14-18の器形から頸部を拡大し、II a文様帯を確立したのが21である。19・20は先行型式で新たな方向性を持ち得なかった土器(9~13)の末裔である。狭いながらも無文帯を持つII a文様帯に21との同時性を見出せるが、これらの土器はここで途絶える。入組文を持ち得なかったことがその要因の一つであろう。

図14-22もII a文様帯は無文帯であるが、波頂部の突起は更に発達し、またII a文様帯とII文様帯の境界にも無文帯を持つ。II文様帯には弧線文が施されるようになる。これら21・22・23から十腰内II群b類が生み出される。その典型が25である。22から更に発達した装飾突起、II a文様帯とII文様帯を画する沈線などを得ている。23からは入組文を発達させた文様、II a文様帯とII文様帯に同種の文様を2段に施し、土器全面に施文する手法を継いでいる。

一方図14-24は25と同じように発達したが、21・22などから器形を大きく変えなかったタイプである。そのため狭いII a文様帯にはII文様帯と同種の文様が施文されていない。しかし、II文様帯には全面施文するために弧

線文を縦に展開している。弧線文は多様化し、26・27のような文様を生み出している。円形刺突文を併用する施文方法は先行型式の17などに既に認められる。

これらの考察から十腰内II群b類は十腰内I式の系統のもとに成立したと考えられる。この段階で極限まで発達したこれらの土器は以後図14-28・29のように退化過程に入り、そして途絶える。しかし、十腰内II群b類に表出する各要素は後続型式に受け継がれるものと考えている。例えば、口縁部突起、頸部にくびれを持つ器形、II a文様帯の存在、弧線文、弧線文などを縦に展開する施文方法、II a文様帯とII文様帯を画する縄文帯、また連続した円形刺突文が転じて刻目文となりほぼ同じ部位に施される共通性などがあると現段階では考えている。その影響力の大きさは十腰内II群b類の分布域の広さを考慮すれば明白である。東北地方のほか関東・新潟でも出土が認められるという(今井・磯崎1968)。

南境2式の段階から常に深鉢と同種の文様を施文されたのが壺形土器である。図14-33の浅鉢や47の片口土器もあるが、数は非常に少なく、深鉢と壺形土器が十腰内I式系土器の主な組成内容である。壺形土器の器形は口縁部が屈曲しながら開き、幅広の体部を持つ単純なものである。十腰内II群b類の深鉢の終焉とほぼ時を同じくしてこれらの器形・文様の壺形土器も途絶えるものと考えている。

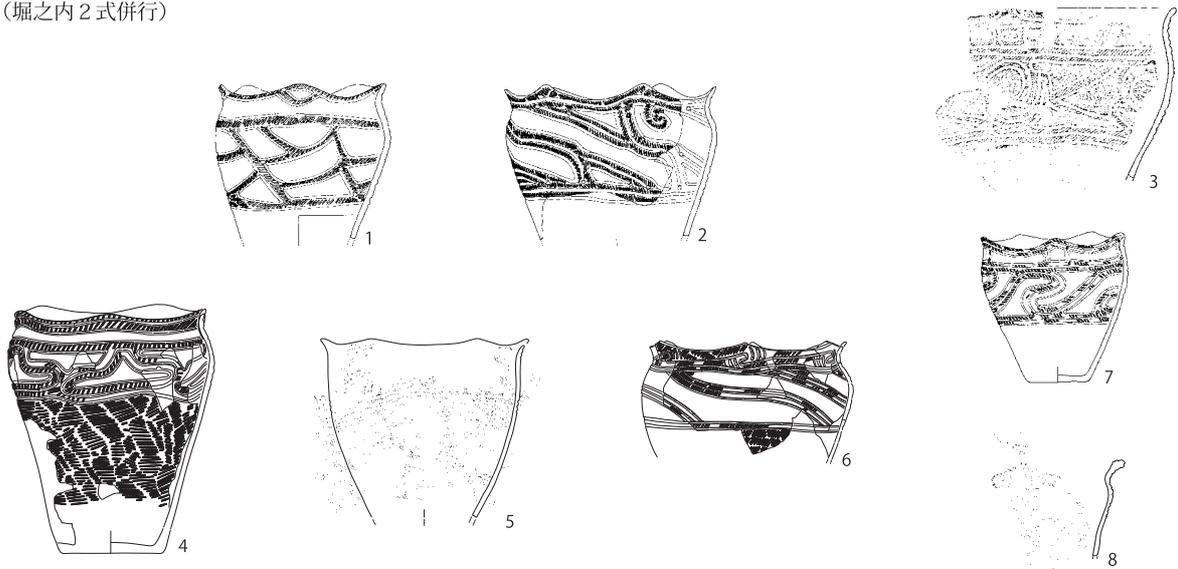
加曽利B1式系土器と十腰内I式系土器

山形県内出土土器の検討であるにもかかわらず、突然遠隔地の土器型式である加曽利B1式系土器としたのは図14-34の浅鉢の存在に因っている。本来ならば福島県や北陸地方、関東北部の土器の検討を経なければならぬであろう。

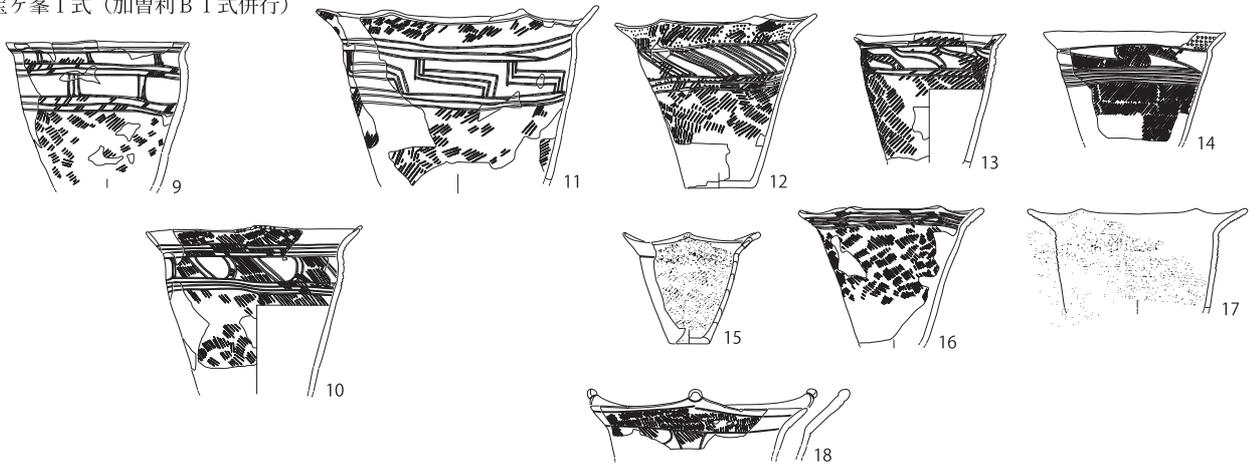
図14-34の浅鉢は堀之内2式そのものと言っても良いと考えている。その数は非常に少ないが、かっぱ遺跡以外に川口遺跡でも出土しており、客体としての存在ながら南境2式の組成に含まれると考えられる。この現象は後続の宝ヶ峯1式段階でも同じで、加曽利B1式そのものと言える浅鉢(45)が出土している。

関東地方系の土器は、南境2式段階では堀之内2式の浅鉢(図14-34)が客体として存在した。宝ヶ峯1式段階では、一旦は衰退の傾向にあった十腰内I式系土器を補うかのように口縁部に平行沈線文を持つ加曽利B1式

南境2式 (堀之内2式併行)



宝ヶ峯1式 (加曾利B1式併行)



宝ヶ峯2式 (加曾利B2式併行)



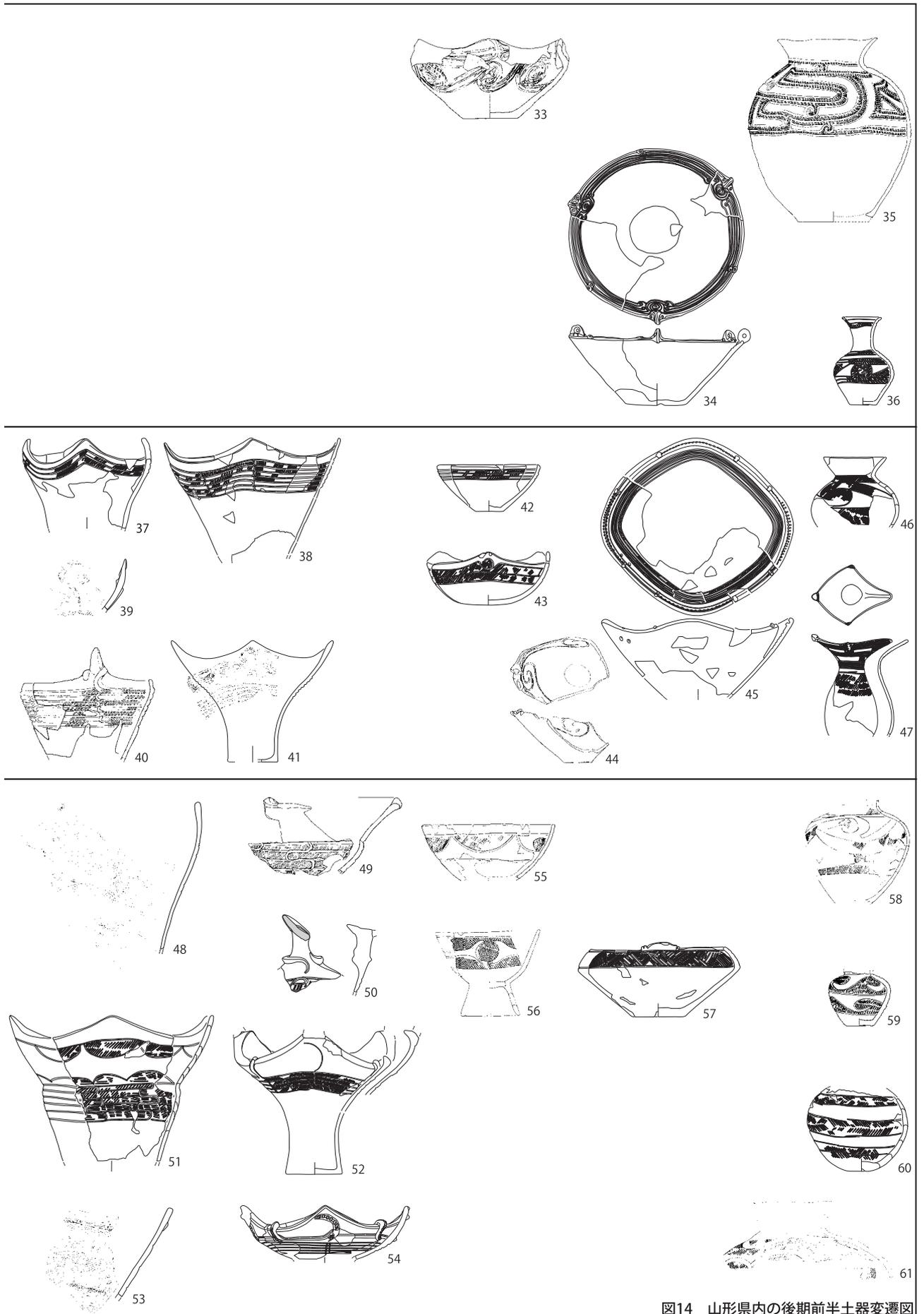


図14 山形県内の後期前半土器変遷図

系の土器が出現する。加曽利B 1式の浅鉢(45)もやはり客体として存在している。関東地方系の土器が、徐々に客体から影響力を増し、主体へと転じようとする動態を示すものと考えられる。

このような背景を認めた上で、宝ヶ峯1式から突如として出現する口縁部に平行沈線文を持つ土器を加曽利B 1式系として考えたい。ただし、浅鉢以外は若干の注口土器の破片資料を除き、全くの関東地方の土器というものは見られず、やはりその影響の下に作られた土器であると言える。客体として関東地方の土器型式が出土するのは青森県の十腰内遺跡でも認められる。報告書(今井・磯崎1968)の322頁、Fig.125の11の鉢である。鈴木氏(鈴木1996)も触れているが「他地域との比較は似ているからといって安易に行うことは避けるべきで」と慎重である。

加曽利B 1式系の土器は図14-37のように平行沈線文を口縁部直下に施すものから、次第に下位に施文する41へと変化する。39や40のように装飾突起を持つものも存在する。

宝ヶ峯2式に至り、十腰内I式系土器と同様に大きく変化する。41のように円筒状の体部を持つ土器は50・52のように波頂部に発達した装飾突起を持つようになる。

この突起に十腰内I式系の土器との共通性があることは既に述べた通りである。そして同じく退化過程に移り54となる。ただし、54のように断面四角形の隆帯で文様を表現する土器は、仙台市王ノ壇遺跡などの宝ヶ峯3式段階で更に発達した様相を示している。一様な方向性ではなく一つの土器でもさまざまな展開があることを示す好例と言えるであろう。

加曽利B 1式系の平行沈線文もこの段階から十腰内I式系の影響を受け弧線文を施すようになる。48などは、器形は大きく変わらず文様のみ置換したものと言えよう。更に頸部を屈曲させII a文様帯を確立させたのが51である。この頸部の屈曲もII a文様帯も弧線文も十腰内I式系の土器の中で系統的に生み出されてきたものである。平行沈線文自体はこの段階を最後とするのだろうが、51が後続型式の原型の一つとなるものと考えている。

十腰内I式系土器と加曽利B 1式系土器の融合は宝ヶ峯1式段階の浅鉢(図14-44)で明瞭に認められる。内

面に入組文を施すこの浅鉢は山形県でも南部の高島町金谷B遺跡の出土であり、その地理的条件も考慮する必要がある。

宝ヶ峯2式段階では十腰内I式系土器が極限まで発達した後一転して衰退するが、その影響を大きく受けた加曽利B 1式系土器が新たな型式の成立を促していると考えられる。

加曽利B 3式併行の宝ヶ峯3式土器の検討は別稿に譲るが、十腰内II群b類と、十腰内I式系土器と加曽利B 1式系土器の融合した図14-51の土器を抜きにしてその成立は語れないことだけは確かである。

5 まとめ

浅学を省みず、3型式に亘る土器群の考察を行った。県内の資料に限っているため、飛躍した部分もあったかもしれないが、これまで東北地方南半部では該期の研究が少なく、混沌とした状況として語られるばかりであった。従って本論によって、少しでも該期の土器編年の理解が得られれば幸いである。

南境2式から宝ヶ峯1・2式について検討したが、その中には十腰内I式系と加曽利B 1式系の土器が混在していることが明確となった。また、十腰内II群b類とされた土器についても、その系統と成立過程が明らかになった。そしてその二つの系統の土器が融合し、後続型式の原型となる予察を述べた。今後は南境1式以前、そして加曽利B 3式以降についての検討、県内に限らず隣接地域まで広げた考察を行いたいと考えている。一つの土器型式を理解するためには、その前後の型式を併せて検討する必要があり、今回その条件を満たすことができたのは宝ヶ峯1式だけであった。これを第一歩として以後研究を進めて行きたい。

筆者が本稿を起こすきっかけとなったのは、かっぱ遺跡の調査を担当し、報告書をまとめながら感じた反省からである。土器型式に関する十分な知識を持たずに調査に臨んでしまったために、種々の土器の層位的な前後関係、共伴関係などの十分な検証を行えなかった。調査終了後に遺物の出土位置を記録した台帳・ラベルを見たら共伴だった、あるいは前後関係があった、という程度では説得力を持たない。やはり現場に臨むまでにどのようなものであれ仮説としての土器編年、その問題点を認識

した上で、検証作業として発掘調査を行うのが本来の姿であろう。問題意識を持った上で出土状況を調査員の目で実際に確認し、詳細な記録を行い、資料として提示できるようにしておかなければやはり説得力に欠ける。

本論では層位的な検証は行わず、ほぼ型式論のみで編年を行った。それでも属性分析(横山1985)を念頭に同一個体内の共存関係をできるだけ利用したつもりである。層位的な証明なしに立論したことについての批判は覚悟しているが、わずかな層位的出土事例では、その共存関係・前後関係を絶対的に示すものではなく、可能性を示すものと考えべきである¹⁰⁾。層位的な検証の際にも慎重な姿勢が必要なのだろう。型式論により理論的に説明し得てこそ土器編年は研究と呼べるのではないだろうか。層位論と型式論が相互に機能し合う必要があると考える。

本稿は仮説として提示した。今後の発掘調査の中で検証作業を行い、型式論・層位論の立場から検証し、本地域の編年を確立させていきたい。

謝 辞

本稿を作成するに当たり、阿部明彦氏・植松暁彦氏・小島朋夏氏には資料収集にご協力いただいた。また、小林圭一氏には土器型式についてご教示を賜った。記して感謝の意を表する次第である。

註

- 1) 平成15年度までは高蹴遺跡^{たかへぐり}という名称であったが、平成11年度より空沢遺跡に変更される。

- 2) 『第14回縄文セミナー 後期後半の再検討一記録集一』縄文セミナーの会 2001年 143頁。この中で小林氏は南境式については保留としているが、その後やはり堀之内1・2式に対応させ、南境1・2式と分類すべきとの指摘を受けた。
- 3) 加曽利B式土器に併行させるという点は筆者と同じだが、大本の加曽利B式についての理解が筆者とは異なるようであり、結果として編年の内容は同じにならなかった。
- 4) 金子氏は、新山権現社1式(金子1994)は加曽利B1式に併行すると述べており、小林圭一氏の宝ヶ峯1式と同じ内容を持つはずであるが、金子氏の提示した資料にはⅡa文様帯の始原的な様相を持つ土器が含まれており、筆者はこれらの土器を加曽利B2式併行のものと考えているため、この兩型式は同じ内容とはならない。
- 5) 東北地方北半部でも浅鉢は加曽利B1式に非常に良く似た内面文様の発達したものが多いという(金子1994)。
- 6) 金子昭彦氏(金子1994)も同様に器形の変化を捉えている。
- 7) この場合の十腰内Ⅱ群b類は磯崎氏が報告書(今井・磯崎1968)で提示した土器に代表されるもので、鈴木克彦氏の「華燭な土器」(鈴木2003)に当たるものを指す。鈴木氏のb類は「曲線的な文様」(鈴木2003)を持つもので、その有効範囲は非常に広い。
- 8) 鈴木克彦氏は十腰内式の類別を型式として用いている。また、ローマ数字ではなくアラビア数字を用いる。つまり、十腰内Ⅱ群b類は十腰内2式b類となる。
- 9) 鈴木氏(鈴木2001b)によると「形態a類の突起が形態b類にも付くものがあり、型式学的な同時性を窺わせるに十分なものである」としている。
- 10) 田中氏(田中1978)によると一度限りの事例による検証では、時間的な前後関係は暗示されたという程度にとどまると述べている。

引用文献

- 秋元信夫 1986「4. 周辺遺跡と大湯式土器」『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書(2)』(鹿角市文化財調査資料31) 鹿角市教育委員会
- 安孫子昭二 1981「関東・中部地方」『縄文土器大成3 後期』講談社
- 安孫子昭二 1998「I 加曽利B式土器資料」『縄文後期加曽利B式・中国地方の陶棺・下総国分寺・尼寺資料』山内清男考古資料9(奈良国立文化財研究所史料 第49冊) 奈良国立文化財研究所
- 阿部明彦ほか 1990『川口遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財調査報告書第151集) 山形県教育委員会

- 磯崎正彦 1964「縄文土器各論 IV 後期の土器」『日本原始美術 1 縄文土器』講談社
- 井田秀和・水口哲 1998『金谷B遺跡発掘調査報告書』(山形県高島町埋蔵文化財調査報告書第7集)高島町教育委員会
- 今井富士雄・磯崎正彦 1968「第16節 十腰内遺跡」『岩木山』岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書 岩木山刊行会
- 伊東信雄 1956「宮城県古代史」『宮城県史1』
- 江坂輝弥 1956「東北一各地の土器」『日本考古学講座 3』河出書房
- 葛西励 1979「十腰内I式土器の編年的細分」『北奥古代文化』第11号 北奥古代文化研究会
- 金子昭彦 1993「IV. 考察」『新山権現社遺跡発掘調査報告書 一般県道長坂東稲前沢箱石橋橋梁整備事業関連遺跡発掘調査』(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第188集)財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 1994「東北地方北半部における縄文時代後期中葉の土器—新山権現社遺跡Ⅲ群1~3類土器—」『紀要XIV』財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 金子昭彦 1995「十腰内I式と大湯式における型式としての諸問題—細分、組成、併行型式の問題—」『岩手考古学』第7号 岩手考古学会
- 金子昭彦 1998「十腰内I式(新)に併行する東北地方中部の土器(3)—型式の骨格—」『縄文時代』第9号 縄文時代文化研究会
- 小関真司・渡辺薫 1997『津谷遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第46集)財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 後藤勝彦 1957「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器編年について」『教育論文』第二集 塩釜市教育委員会
- 後藤勝彦 1962「陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について—陸前地方後期縄文式文化の編年的研究—」『考古学雑誌』第48巻第1号 日本考古学会
- 後藤勝彦 1974「縄文後期宮戸Ib式周辺の吟味—南境貝塚出土の土器をもととして—」『東北の考古・歴史論集』平重道先生還暦記念論集 平重道先生還暦記念会
- 鈴木克彦 1996「東北地方北部における十腰内式土器様式の編年学的研究—十腰内2式土器の研究—」『考古学雑誌』第81巻第4号 日本考古学会
- 鈴木克彦 2001a「第5章 東北地方北部の縄文時代後期の土器型式」『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣
- 鈴木克彦 2001b「第9章 北日本の後期編年体系」同上
- 鈴木克彦 2003「宝ヶ峯式土器の研究—宝ヶ峯様式の細別—」『縄文時代』第14号 縄文時代文化研究会
- 縄文セミナーの会 2001『第14回縄文セミナー 後期後半の再検討—記録集—』縄文セミナーの会
- 田中琢 1978「型式学の問題」『日本考古学を学ぶ(1)』有斐閣
- 本間宏 1985「東北地方北部における縄文後期前葉土器群の実態」『よねしろ考古』第1号 よねしろ考古学研究会
- 福澤美幸・衣袋忠雄 2002『小山遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第104集)財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 水戸部秀樹 2003『かっぱ遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第114集)財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 山口博之・渡辺薫 1995『渡戸遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財センター調査報告書第35集)山形県埋蔵文化財センター
- 山内清男 1932「縄紋土器文化の真相」『ドルメン』1-4
- 山内清男 1964「縄文式土器・総論 V 文様帯系統論」『日本原始美術 1 縄文土器』講談社
- 横山浩一 1985「3 型式論」『岩波講座 日本考古学 1 研究の方法』岩波書店